政策広報

安平町の交通を考える・守る

私たちの暮らしの中で道路の整備や鉄道などの公共交通は重要な役割を持っています。

歴史をたどると町の発展に大きな影響を与えてきた交通ですが、その主役は時代と共に大きく変化しています。

町の支援や管理・運営で維持をしているものなど、支えなければならない目的や意味を考えましょう。

町を築いた交通の歴史

鉄道の開通もしていなかった明治6年（1873）、開拓使がつくった札幌本道（室蘭－札幌間）が北海道の交通の中心であり、そこには馬車・馬そりが行きかっていました。

その新道の要地「美々」に移り住み、そこで得た鉄道建設の情報をもとに、後に安平村の開拓者となった者たちが明治22年、フモンケの入地開墾したとされています。

明治25年（1892）室蘭から岩見沢方面への炭鉱鉄道室蘭線が開業し、同時に設けられた追分停車場。

夕張への分岐点として「アビラ」と呼ばれていた地域を明治28年停車場名にちなんで「追分」と改称しました。

このように町の始まりは、道路や鉄道をもとに進んでいった歴史があります。

JR

町内から利用できるJR路線は苫小牧、岩見沢方面への室蘭本線と札幌、釧路方面への石勝線が走っています。

通勤通学や買い物への利用が主な利用となっていますが、利便性の向上のために町では列車本数の増便などの要請を続けています。

しかし現状では利用者の増加が見込めないため、あまり進展のない結果となっています。

石勝線開業30周年

鉄道の町として栄えた追分は、石炭輸送の減少に伴い路線の役割は低下していましたが、昭和56年10月1日開通の道央と道東を結ぶ「石勝線」の開業が、その利便性を生かしたまちづくりへの一歩となる好機の到来となりました。

しかし国鉄の合理化や民営化により駅や機関区の縮小は大きな人口の減少を招き、その開業の恩恵はわかりにくいものとなりました。

町が設置した記念幕

開業から30周年を迎える本年度、安平町は**祝意を込めた周知活動**を行ない改めて利便性をアピールしたまちづくりへの契機としています。

民営バス

現在のあつまバスは、早来厚真間の馬車鉄道が始まりで木材の搬出が目的の鉄道事業者でしたが昭和24年、厚真早来間の旅客バス事業に転換をはじめた頃の昭和26年、早来運輸株式会社として改称し、早来追分線など路線を拡大して平成3年に現在の「あつまバス」の名称で営業を行なっています。

安平町では通学路線でもある赤字が続く厚真（早来経由）追分線の維持のため**地方バス路線維持費補助金**を交付し路線の確保を行なっています。